

■ ジェンダーセッション

イギリス小説にみるフェミニズム

三浦 雅弘 (ジェンダーフォーラム協力委員、立教大学社会学部教授)

『オクスフォード英語辞典』によると、「フェミニズム(feminism)」という英語は19世紀後半より用いられているようだ。よく目にする邦訳には、「男女同権主義」、「女権拡張主義」、「女性解放主義」などがある。20世紀を代表する小説家のひとりであるヴァージニア・ウルフ(Virginia Woolf, 1882-1941)は、そのような意味でのフェミニズムに先鞭をつけた論客でもあった。ウルフについては、2002年のステイヴン・ダルドリー監督作品、「めぐりあう時間たち」によってアカデミー主演女優賞を獲得したニコール・キッドマンが彼女を演じていたことで記憶している人々も少なくないだろう。

第二次大戦中に入水自殺を遂げたウルフに対して、1960年代以後に作品を発表しているマーガレット・ドラブル(Margaret Drabble, 1939-)も、フェミニストと呼ばれる資格を十分に備えている。しかし時代の推移もあるせいか、ドラブルのメッセージには、先鋭なウルフの議論とは一味異なる柔らかさを感じられる。本稿では、このイギリスの女性作家二人の態度を比較することで、フェミニズムを考える糸口を探ってみたい。

ウルフの方法論的意識

ウルフは、こと女性が文学作品を創造しようとするときには、そこにフェミニズムの意識があらわれることを警戒している。というよりはむしろ、そのような意識が明らかな作品を評価していない。「女性と小説」と題されたエッセイにおいて、彼女はこう述べている。

『ミドルマーチ』や『ジェイン・エア』の中で、そこに女性が存在すること—女性の取り扱いに憤慨し、その是正を求めて弁じ立てているひとがいることに気づくのである。このことは女性の書くものの中に、男性が書くものには全く存在しない或る要素を持ち込むのである。それは歪みを加えることになり、しばしば弱点の原因になる。

ウルフによれば、ジョージ・エリオットの諦めや、シャーロット・ブロンテの憤りは、ウルフと同時代の女性作家たちの中に悪しき影響を及ぼしている。例えば彼女たちの不自然なまでの自己主張は、結果としてその作品群に無意識的な不誠実をもたらし、芸術にとって最も本質的な性質を失わせているという。彼女のこの認識は、20世紀を代表するその小説作品のうちに、平静に維持されているように思われる。

ところがその冷徹なウルフも、エッセイの中では歯に衣着せずに男性中心社会に呪詛を浴びせている。『自分だけの部屋』の巻頭間もない箇所、「オクスブリッジ」の芝生を何気なく突っ切ろうとした彼女が、怒った大学の男から不当に見下されたという出来事を述べるくだりは興味深い。同書における彼女の分析によれば、世の男性による女性の劣等性

の強調は、男が自分の容姿や能力を実際以上に大きく映し出すための鏡として女を必要とする、という役割設定から要請されたものとされる。エッセイでは随所に顔を出す彼女のこの種の主張には、戦闘的でもあれば、どこか上昇志向的な印象が漂っている。その理由のひとつには、繊細な神経と豊かな素養とをもちながら、女性であるがゆえに大学で学ぶことすらできなかったという当時のイギリスの社会的背景であろう。女性の地位をいわば「男性なみ」に引き上げるためには、ひとりで専有して仕事に打ち込める自室と、そうして得られる年間 500 ポンドの収入とが必要だという一節が、『自分だけの部屋』の中でも特に人口に膾炙した主張であった。

ちなみにイギリスにおいて婦人参政権が確立されたのは、ウルフの時世においてである。しかしそれも一挙にというのではなく、実施は段階的であった。まず 1918 年に 30 歳以上の女性に参政権が認められ、その 10 年後に男性と同じ 21 歳以上に改められたのである。日本ではそれとほぼ同じ時期には、男性一般の参政権が認められるのがせいぜいであった。かつては年間 15 円以上の男性納税者（人口比で 1% でしかなかった）にのみ認められていた衆議院議員選挙権が、1925 年に満 25 歳以上の男子すべてに拡張され、1945 年に至ってやっと婦人参政権が閣議決定されたのである。

ドラブル、『礪臼』のセンセーション

『礪臼』は、ドラブルにとっては第三作に当たり、作者自身とも重なるシングル・マザーの生き方を描いて、発表当時の 1965 年には物議を醸し出すれば、69 年には映画化もされた、彼女が 26 歳のときの作品である。

主人公のロザマンドは、ケンブリッジで英文学を専攻し、いまは大学教師になるべく博士論文を執筆中である。アフリカに赴任している大学教授の父のフラットで気ままな一人暮らしをしているが、ものはずみで、ゲイの友人ジョージを相手に初めての肉体関係を持ち、妊娠してしまう。中絶が認可されていなかった当時のイギリスで、彼女は流産をはかるものの果たせず、結局ジョージにも両親にも知らせずに女の子を出産し、オクティヴィアと名づける。妊娠、出産、そして愛娘の先天性心疾患の発見とその手術といった数々の経験は、結果的にロザマンドを強い母へと鍛え上げて行く。その過程において、ロザマンドは、それまで周囲にいたエリート集団とは似ても似つかぬ人々から思いがけない好意や援助を得る。出自にも才能にも恵まれた若い女性が、わが身に引き受けた子供を通して初めて経験する他者とのふれあい、心の通いあいが、この作品の主題であると言ってよい。

ドラブルは 1990 年には来日して、講演や対談の中で、『礪臼』出版当時のエピソードを披露している。例えば主人公のロザマンドが、未婚の母となることを正しい選択だと考えたことには、想像を絶する抗議が押し寄せたらしい。興味深いのは、ドラブルが自身の最初の子を育てていた当時を回想して、妻であり主婦であることは、自分自身であること、その感覚を脅かすように感じられたが、その一方で母であることは、自己同一性を強化していた、と述べていることである。

生理学的事実とフェミニズム

抽象的な意味での女性性は男性のうちにも存在する以上、フェミニズムは女性性を普遍的な社会的原理として公認し実践して行こうとする契機をも蔵している。フェミニズムがジェンダー論と接点をもつのはそこにおいてである。しかしジェンダー論の基盤はあくまで社会学的考察に求められるのに対して、フェミニズムにおいては明らかに生理学的な事実が一定の位置を占めている。シングル・マザーの道を選ぶことは社会学的現象かもしれないが、妊娠、中絶、授乳といった経験は、第一義的には生理学的現象である。そのような生理学的経験を語るのに適した言葉は、伝統的な文学を構成する言語のうちには見いだせず、ドラブルはそれらを自分で探すほかはなかったという。ある経験について適切な言葉を手にすることは、その経験を真に自らのものとするのである。ドラブルが探し求めて手に入れることのできた言葉は、彼女のフェミニズムを生理学的な基盤に根づかせることに寄与したに違いない。

ロザマンドの信念は、彼女自身とオクテイヴィアの真の自立と解放へと至る道として、私生児の母という選択肢をつかみとらせた。両親の教えにも世間の因習にも背を向けて、自分自身がよしと思う方角へと彼女は歩み出す。この主人公の行動の爽快なまでの潔さには、どこか突き抜けたようなほの明るさを感じられる。おそらくドラブルには、フェミニズムを生理学的な深みにまで降下して血肉化している強みが備わり、それが彼女の作品全般に潔いほの明るさを与えているのではないだろうか。

2002年度後期の文学部英米文学科の講義では、受講生に『礪白』を対象としてレポートを書いてもらった。多くはロザマンドの生き方に共感を寄せ、優れた考察も少なくなかったが、例えばあるレポートは次のように結ばれていた。

ヴァージニア・ウルフのフェミニズムが男性優位への攻撃的な筆致で表されていたのに対して、ドラブルの主張は静かで、しかし重みをもっている。子供を宿すという能力とその効力を称え、同時にそれにとまらぬリスクを描き、そのリスクを越えさせることによって、ロザマンドの女性としての自立、強さは鮮烈なものになっている。

文献

1. ヴァージニア・ウルフ／朱牟田房子訳、「女性と小説」（『ヴァージニア・ウルフ著作集7 評論』に所収、みすず書房、1976年）
2. ヴァージニア・ウルフ／川本静子訳、『自分だけの部屋』、みすず書房、1999年
3. マーガレット・ドラブル／小野寺健訳、『礪白』、河出文庫、1980年
4. 高野フミ編、『マーガレット・ドラブル東京講演』、研究社、1991年
5. 三浦雅弘、『20世紀の英国小説』、丸善プラネット、2002年